

英語科

writingとspeakingをセットにした Show & Tellの指導による英語産出能力の育成 —授業公開用ビデオ～私の授業～の作成を通して—

鈴木 克彦

【抄録】 話す・書くという発信の英語指導の必要性が高いにも関わらず、クラスサイズや手間のかかることから、表現を主体とする中高での英語指導はあまり行われていない。話す・書くの英語産出の指導は読む・聞くの英語を習得できたかを確認することに使われたにすぎないと言える。発信型の英語能力を身に付けるためにはトピック選択のレベルからの指導が必要である。選択教科プロジェクト「英語表現」では、少人数異学年集団での授業形態で、Show and Tellに特化した活動をさせ、英語で自分を「語る」ことを通して学習者共同体を作り上げることができた。なお、授業はすべて録画され、中部英語教育学会福井大会にて発表した。

【キーワード】 授業公開ビデオ作成 Show and Tell 英語産出能力 Dialogue Journal アウトプット仮説

1. はじめに

「選択教科プロジェクト」とは何か？

中学2、3年生が対象、複式少人数クラス（20名以内）で教科の基礎・基本または普段の授業で追及したい内容だが時間が足りないというものを教科として教えることができる。また、複式というスタイルにより、2、3年生間での学習のプラスの相互作用が期待される。できれば「経験」を主体にした学習スタイル、また外部講師などをできるだけ招きいれての授業を行う。

英語では「英語表現Show & Tell」と「Make Drama」の2講座が開設されている。他に「デジタルアート（美術）」「附属発未来のスポーツ（体育）」「数検にチャレンジ（数学）」など全10講座ある。

これらは隔週2時間が設定されている。（他の隔週は「総合人間科[総合的学習]」が行われている。）生徒はこれらの中から2年間で4講座（半年で1クール完了、時間的には8週、16時間）を選択することができる。

なぜ授業公開用ビデオを作成するのか？

選択教科プロジェクトという新しい試み広く知ってもらうため、英語教育関係の集まりや学会など機会あるごとに、ビデオで発表を行った。レジュメや口頭発表などだけではわかりにくい実際の生徒の活動、教師の役割などが一目でわかるものとしてビデオは大いに役立った。この1年6ヶ月の間のすべての「英語表現」の授業をビデオ撮りをし、45分のビ

デオに編集したものである。

なぜShow and Tellに特化した「英語表現」を設置したか？

英語教育でアウトプットの重要性（後述）に注目されるようになってきた。外国語を修得するためには、目標言語を大量にしかも比較的長期に渡って聞く・（読む）などの受容段階を得た後、話す・書くというアウトプットへと段階的に進むものとされてきた。自然言語の習得過程の観察から妥当とされていたが、実際に目標言語を使用して「気づき」や「修正、再加工」することによって定着を促すことが容易となることがわかってきた。

Show and Tellはドリル的な学習と違い、生徒が自らの関心事を話題の中心にできることから、学習における自己準拠効果を期待できる。意味のあるまとまりのある内容を扱うことから、生徒が飽きることなく取り組むことができる。

Show and Tellの問題点は40人相手の通常の授業だと数をこなすことができないことである。精力的にやろうと思っても、一人あたり一年に多くてせいぜい2、3回、年によってはShow and Tellの単元があるときの1回だけ教室前面での発表となる。教科書をこなすことだけで手一杯なら省略さえされてしまうかもしれない。Show and tellだけに特化した授業を集中的にやってみたいものだと常々思っていた。

2. 背景理論

(1)アウトプット仮説

Swain (1985) は話ことばであれ、書きことばであれ、発話 (language production) を通して言語習得は起こるとしている。カナダ、イメージョンクラスでのフランス語習得過程で、fluencyはネイティブ並に上がるが、accuracyに関しては、長期のイメージョンクラスの経験を経ても上がらないことから、理解可能なインプットに加えて、理解可能なアウトプットも言語習得に重要であると説いている。

第2言語習得におけるアウトプットの役割として、Swain (1998) は次の3点を挙げている。

- (a) Noticing
- (b) Hypothesis formulation and testing
- (c) Metatalk

(a) Noticingとは学習者が自分の言いたいことが正確に言えないことに気づくことである。この気づきは、発話をしようとする時に、学習者が自らの言語的問題点を意識化することである。この場合の発話とは話す・書くの両者を指す。Noticingについては、心理学研究の知見から、Schmidt (1990) は、「気づいたものが第2言語習得のためのintakeになる」

(Sakai, 2001に引用あり)として、これを気づき仮説 (Noticing Hypothesis) と称している。

(b) Hypothesis formulation and testingとは、学習者が新しい言語形式を中間言語のレベルで自分なりに発話の中で使ってみたとき、外的resourceからのfeedbackにより、その成否を知り、自分の発話を修正、再加工を行なうことである。

(c) Metatalkとは、二者間以上の学習者で発話したことばを学習者自身が降り返りながら、言語使用についての話し合いを行なうことである。認知心理学などで言われるメタ認知を意識した用語であろう。意味を理解する (making meaning) というコンテキストの中で行なわれるもので、学習者自身に役に立つだけでなく、一種の教授手段とも言えるものである。

Swain (1985) のアウトプット仮説はあくまで理解可能なインプットを十分に浴びているイメージョン・プログラムの生徒に対して立てられている点や理解可能なインプット仮説を否定していない点を考慮する必要がある。またSwainのいう学習者は、流暢さではネイティブ・スピーカーに近い者を指している。Metatalkも、目標言語で行われている。

Swainのアウトプット仮説を単純に日本の学校英語教育に当てはめることは問題があるのは承知だが、noticingやformulation and testingが言語習得の重要な機能を果たすことは、イメージョンクラスだけ

なく、communicative approachでaccuracyを高めるのには有効な理論裏付けとなるのではないか。

(2)発信型の英語指導

日本の英語学習環境で、アウトプットはある意味で重視されてきたと言える。しかし、これはあくまで、focus on forms (伝統的文法重視指導) 的な意味においてであり、Doughty (1998) らが言うfocus on formはmeaning focusedなnegotiation of meaningを伴うcommunication breakdownからnegative feedbackを受け、そこから新たにcomprehensible outputを要求されるような場面で有効なのである。

鈴木 (1999) は、日本の国際的な政治状況の歴史の変遷の中で、英語学習への社会的要望が受容型から発信型英語の習得へと変化しているのにも関わらず、これまでの英語学習は何年やってもアメリカ人、イギリス人のように英語がしゃべれないという劣等感ばかり植え付ける結果になっていると指摘している。これはアメリカ人、イギリス人にならねばとか、日本人だからだめなのだという自己脅迫的観念とも言えるだろう。英米の文化歴史の中で育まれた英語を学ばせようとする情報輸入型の英語から国際英語ないしは国際補助言語としての英語を学ばせることが肝要であると主張している。

さらに日本の英語教育への一提案として、中学では身近なことを高校では日本社会、文化、歴史などを英語で表現することを徹底的に行なうことを提示している。教材は日本を扱ったものだけにして、一貫して徹底的な自己表現と日本的なる物を英語化するという発信型への転換を強く主張している。

(3)自己準拠効果

記憶研究から、情報は短期(作動)記憶からリハーサルによって長期記憶へ転送されることが分かっている。短期記憶の情報は十数秒で消えてしまうが、リハーサルを繰り返すことで長期記憶へと転送される。単純に頭の中だけで繰り返すだけ(維持リハーサル)では、長期記憶に情報を定着させるのに十分ではない。リハーサルのうちでも長期記憶に情報を転送するよう精緻化リハーサルでは、単にことばを繰り返すという浅い意味的な処理ではなく、深い意味処理を受けた情報は記憶されやすい。形態、音韻、意味的手段で記憶されるより、「自己」という親しくまた複雑なものとの関係付けた記憶は保持されやすい。これは記憶したい事柄は、なるべく自分自身と関連付けて覚えるようにすればよいと言える。(釜原, 1999)

(4) Dialogue Journalの特色

高校生を対象としたDialogue Journal (DJ) を実践した佐藤 (2002) は、DJの特徴として、次の3点を挙げた。

- ①対話性 ②交流的足場作り ③失敗の場作り

日記という形式ではあるが、教師とのジャーナル交換は、「対話性」という人間的な関係性を内包する。そのため教師-生徒間のやりとりであっても、互いを個人として尊重しなければならない。教師は常に対話を意識し、内容に関する応答を行おうとするレスポンスを与える。

一方、英語のexpertである教師の英語をnoviceである生徒はレスポンスとして受け取ることで、その共同作業の中からコミュニケーションの成立にとっての不具合となるaccuracyの不足を自ら気づき、修正することを行う。これはSwainのNoticing (気づき) からHypothesis formulation and testingへのアウトプットを形作る一連の学習過程、またヴィゴツキーのZPD (発達の最近接領域) でのnoviceとexpertとの関係性の中で生まれる教授-学習のダイナミズムとも関連がある。子供は大人との共同作業の中で目の前の課題の解法を直接教授されなくても自然に問題解決していく能力を身につけていく。これはZPD理論と不可分な支持理論を展開したBruner (1976) らが言う「交流的足場作り」(interactional scaffolding) である。

失敗を動機付け心理学的な意味での学習目標論から見るととにする。一般的に学習目標については習熟目標 (mastery goal) と遂行目標 (performance goal) の2つが考えられている。いずれも内発的動機付けに基づいたものであるが、習熟目標では学習そのものへの関心が高まる、自己内評価をする、誤りは学習のプロセスの中で必要なものと考えられる。遂行目標では、よい成績を取りたい、他者との比較評価を好む、誤りは避けなければならないと考えられる。学習への効果、持続性が高いのは学習目標志向の場合であり、誤りを犯すことが恐れや躊躇にならないように、クラスや学校風土を学習目標志向 (mastery goal orientation) へ変えるべきである (Wigfield, 2001)。

(5) 社会文化的アプローチ …Tharpの教育的会話…

40人の生徒を相手に行う通常の授業での教師-生徒間の対話は、多くの場合、教師の質問に生徒が答え、それに対する評価を教師が与えるという教師-生徒間の対話でありながら、課題-評価 (assign-assess) だけで成り立ち、肝心の教育的会話 (instructional conversation) (Tharp, 1990) に欠けた

対話に終わっていないだろうか。生徒の個々のアイデアを取り上げ、練り上げさせ、完成させるような支援的な発言を教師がする必要がある。

生徒たちの机の配列もひとりひとり分断され、大勢居るにも関わらず、教師との1対1の関係以上のものになっていない。もちろんペアワークやグループワークをさせることもある。教師によって念入りに作られたワークシートの中に答えながら、すでにスクリプトとして出来上がっているcommunicativeな会話を完成させる。ペアワークやグループワークは教師の教育的配慮から間違っても許されず、がっちり固められた一本道の先にある同じ結論を得るための努力をお互いがしたかをチェックしあう機能しか持ち合わせていない。スクリプト化された授業には、生徒の学びへの要求がほんとうに反映されているのであろうか。

ヴィゴツキーの発達の最近接領域をもとに、学習者中心の教授学習活動の中で、教師の活動をTharp & Gallimoreによる7つの支援的活動 (1989) の観点から授業を見てみようと思う。

モデリング (Modeling) フィードバック (Feed back) 場に合った対応 (Contingency managing) 方向付け (Directing) 問いかけ (Questioning) 説明 (Explaining) 課題構築 (Task structuring)

3. 授業公開ビデオの内容

2002年度前期~2001年度前・後期のすべての授業をビデオ撮りをして、その中から次のシーンを選び、45分の授業紹介ビデオとして編集した。内容は下に示したとおりのものである。このビデオは中部英語教育学会福井大会で発表されたものである。

1 中学2、3年生によるShow & Tell 2 ドラフト書き 3 リハーサル 4 Story Making Game (PIE OF MY LIFE: Real and Ideal) 5 Teacher's Show & Tell (ALT's & JTE's) 6 Show & Tell Party (公開授業で、いろいろな人に聞いてもらう。)

(1) 中学2、3年生によるShow & Tell ⇒課題構築 (Task structuring)

4月最初の授業は、自己紹介から始まる。2回目

以降からShow and Tellを行う。弓道部の生徒は弓道に使う道具を見せながら、Show and Tellを行う。弓道の歴史を調べることもする。Show and Tellが終わって生徒が席に戻ってから、弓を打つときの動作をして見せてほしいとたのんだら、丁寧にその動作を見せてくれた。彼は毎回弓道の関係のShow and Tellを行った。

このビデオでは家庭からShow and Tellの素材もってくるのを忘れてしまった生徒のShow and Tellも入っている。たまたまそのときこの生徒は数学の先生の連絡メモもっていた。聞けば、彼は数学係で、クラスへの数学についての連絡を先生からメモをもらってするとのことだった。私などは英語係に連絡事項を口で言うだけで、メモを書くなど面倒なのでしないのだが、正確に生徒へ伝えたいという数学の先生のまじめさが伝わるものだと彼に言うと、確かに間違えずに連絡できるのはこのメモのおかげと気づいたようで、後から普段当たり前と思っていたことをことばにすると気づいていなかった大事なことがわかるような気がしたと感想を述べた。

(2)ドラフト書き ⇒方向付け (Directing) 問いかけ (Questioning) 説明 (Explaining)

家庭からもってきた愛用の品物を机に置き、それについての英語で説明文をノートに書く。このノートをAction Logというタイトルをつけ、この活動を支えるメモ帳、雑記帳として使う。アイデアを出し、文章を練っていく大切な道具である。

コの字型に並んだ机の配置に12人の生徒が座り、Action Logを書く。コの字の中を教師が忙しく生徒の質問に答えながら回る。和英辞典で調べる生徒もいる。隣同士で尋ねあうこともある。

(3)リハーサル ⇒モデリング (Modeling) フィードバック (Feed back)

ペアまたは数人のグループを作って、互いに自分が考えてきた英語を発表しあう。何人もの人に同じ内容で繰り返し言うことで、英語が滑らかに口になるようになったり、友人からの間違いの指摘を受けたりして英語が洗練されて行く重要な過程である。もちろん教師もこの中に入って、自らのShow and Tellを練習する。

(4)Story Making Game (PIE OF MY LIFE: Real and Ideal) ⇒問いかけ (Questioning)

Show and Tellをさせる前段階としてのタスク。PIE OF MY LIFEは1日の時間の使い方をパイに見立てた円に現実の時間と理想の時間を書き、それを

英語で説明するものである。学校での学習や塾・習い事で忙しい生徒たちの理想の時間配分は部活動が1日に6時間、友達とおしゃべりが3時間、ショッピングに3時間、後の12時間は睡眠となることもある。

これ以外にStory listeningやStory makingというタスクも生徒には人気がある。Story listeningは4枚の英文カードとそれに対応した4枚の絵のカードを読み手と聞き手に分かれて、聞き手はストーリーに沿って絵を順番に並べていくものだ。他愛もない作業なのだが、中2、3年生ぐらいいでも喜んで取り組む。ストーリーは古い中学の教科書から持ってくる。これらはたいてい4パート構成になっており、挿絵も付いているのでリサイクルすることになる。出版社が違えばさらにいろいろなバージョンができる。

Story makingもリサイクル物である。教科書準拠のピクチャーカードは教科書が改定になると、高いお金を出して買ったにも関わらず、廃品となる。そこでこれを捨てずにStory makingで再デビューしてもらおう。生徒たちはこの廃品となった何百枚ものピクチャーカードからランダムに4枚取り出して、グループないしはペアでストーリーを作る。お互いに作ったストーリーを発表しあう。

(5)Teacher's Show & Tell (ALT's & JTE's) ⇒モデリング (Modeling)

先生も一種のrole modelとして役割を担う。私は2年前に夜間の大学院で英語教育学を学んだ。その大学院修了書を生徒に見せShow and tellを行った。2年前入学試験をうけるとき、子供から金の無駄と言われたが、2年後、修了書を見せたときには拍手をしてくれたという内容である。ALTはIt's a waste of time. またはIt's a waste of time and moneyと言うべきところをIt's a waste of money. とするmoneyだけに固執した表現に、selfishなこどものようすがみえておもしろいと言っていた。

(6)Show & Tell Party (公開授業で、いろいろな人に聞いてもらう。) ⇒課題構築 (Task structuring)

最後の授業では少し長めのShow and Tellを行う。ビデオでは多くの参観者が写っているが、本校研究協議会での授業公開場面である。保護者を招待したり、ALTを招待したり、手のあいている先生を招待したり、いつもと違うメンバーに聞いてもらう試みである。

自作の詩集を紹介し、詩にメロディーをつけ歌った生徒Kがいる。彼女は途中の英文作成過程を私には見せずに進めていたので、英語がわかりにくいも

のになった。しかし、演劇部の彼女の意欲満々のパフォーマンスに感心せざるをえない。

英語が大の苦手で英語大嫌い人間のNは、ペットの犬「ショコラ」の話をした。あまり自分は犬の面倒をみないので、よく面倒を見る母親に比べると、犬から嫌われているという内容の話だった。クラスでの通常の英語の授業では指名されないようにといつもうつむいている。指名されると「わかりません。」という答が多いのだが、この選択教科「英語表現」では恥ずかしそうにはしているが、拒否的な態度は一度もとったことがなく、私の指導にもよく応じている。

映画「学校Ⅳ」の屋久島の縄文杉を求めて旅をする主人公に感動したFは、ビデオでついに縄文杉にたどり着いたシーンを皆に見せ、自分の思いを英語で語った。もちろん難しい表現はできないのだが、このビデオのシーンは彼女の英語の足りなさを十分に補う迫力があり、まるで彼女がこの映画のディテールまで語ってくれたかのような錯覚さえ覚えた。

Tは家庭で好きなエレクトーンの演奏場面をビデオカメラで撮ってきた。5分の持ち時間の大半を自らのエレクトーン演奏シーンに使ったTは、普段のShow and Tellではロボットのプラモデルやカードゲームなどといった内容についてである。この日のTのエレクトーン熱演に皆驚いた。

4. 「英語表現Show & Tell」の授業

(1)年間指導計画 (年2回)

- 第1回 (1)English Self Introduction
(2)Pie of My Life #1
- 第2回 (1)Show & Tell #1
(2)作品の構想、準備
- 第3回 (1)Show & Tell #2
(2)Drawing a picture in English
- 第4回 (1)Show & Tell #3
(2)Listen to a story and make a right order of the pictures
- 第5回 (1)Show & Tell #4 (2)作品作り
- 第6回 (1)Show & Tell #5
(2)作品作りと仮発表会
- 第7回 (1)Show & Tell #6 (2)Pie of My Life #2
- 第8回 作品発表会<絵、ビデオ、BGMを使った演出で、口頭発表で行う>

(2)授業内容 (生徒に授業内容を紹介した文章)

「毎回、1時間目はShow and Tellをやります。(1回目だけちがうけど)

Show and Tellは、自分のもちもの、写真など家庭から教室に持ち寄り、それについて英語でいろいろなことをまずノートに書きます。それをスピーチにまとめて練習した後、みんなの前で発表します。

このスピーチは「持ちネタ」として、いつでもどこでも出来るようにします。例えば、外国からだれかさんをご招待して、「Show and Tellパーティ」を開いたときに、やってみよう。そんなの覚えられかと思うかもしれないけど、だいじょうV!!誰でも自然に覚えることができます。

「犬のショコラ」と言われれば、ペットの犬の話英語でペラペラと喋りだすようになります。8回の授業で、一人8個の英語Show and Tellを持ちネタとして、「Show and Tell寄席」などを開いてもいいですね。ともかく同じネタを何度もやることで、伝わる英語、心のこもった英語になっていきます。2時間目は、いろいろな英語表現ゲームをして、英文を書いたり話したりする能力や他人の英語を聞く力を高めます。

最後に、後半の4回ぐらいかけて、とっておきのスピーチ作りもやります。これは絵、写真、ビデオ、歌、詩+BGM、照明効果、衣装などを使い、やや長めの内容の濃いスピーチを時間をかけて作ります。最後にお客さんを招いて発表会をします。」

5. 2001年度と2002年6月までの授業実践から

(1)2001年度の実践

2000年度は高校生を対象にTeacher's Storytellingの実践を行った(鈴木, 2001)。これは教師のpersonal storyを聞かせ、リスニング能力の向上、コミュニケーション志向の英語学習動機付け、教師・生徒間の関係改善、学習コミュニティの創出等をねらった実践であった。この実践から私は教師・生徒相互によるstorytellingの実践へと結び付けようとしたが、高校生は人前で話すこと、まして英語でとなると怖気づいてしまい、うまく実践できなかった。しかし「書く」ことへの抵抗は少なく、書かれた作品としてみるとおもしろいものが多く、何らかの形で共有したいものだと思った。また中学生のころからスピーチの指導をしていれば、スピーチはそれほど抵抗はないのではとも思った。幸いにも私の勤務校は中高併設校でもあり、英語科内でもproductionを重点化した指導を中1から中3まで昨年度から展開している。一例としてLong Term Project(木下, 2001)がある。

2001年度からは、中学では「選択教科プロジェクト」(高校では「新教科群」)を文部科学省教育課程開発研究として学校全体で取り組むことになり、中

学の英語教科書でも取り扱われているShow & Tellに特化した授業をやってみようと思った。もちろん必修の授業でもShow & Tellは行うが、一人あたりの実施回数は年に2～3回程度である。これを年間6～7回または同じ内容で2度、3度と行うとすればoral presentation能力もかなり向上するのではないだろうか。

2001年度、実際に講座を開いてみると、他の教科に比べ、あまりにも教科色が強いのと、英語はMake Dramaのクラスもあるので、英語希望者を取り合う形になり、定員20名のところを7名という超少人数クラスとなった。またほとんどの生徒が希望者の多いクラスからはじき出された者が多く、「英語表現」を第1希望とする生徒は7人中2名であった。

集まった生徒で英語が苦手な者は7人中5名であった。第6希望までの中に「英語表現」を書いたことを後悔する生徒さえ居た。このような状態からの出発ではあったが、ALTが1名この講座につくことになったのは幸運であった。

ノリの悪い出発であったが、回を重ねるにつれて、生徒の中に変化が見られるようになった。「おもしろい」という言ってくる生徒も出てきた。これは日本語だけの世界なら恐らくShow & Tellで話題になるようなことで会話をするのではないが、お互いが知らないプライベートな面を知るようになり、一種のこの時間だけのコミュニティーが出来てきたからであろう。初歩的な英語で、誤りを許しあえる「語り」の共同体とも言える世界で伝え合うおもしろさを経験できるのである。

(2)2002年度の実践— Dialogue Journalと必修英語にも関連付けて—

2002年度も継続してShow and Tellに特化した授業を、中学2, 3年生複式少人数クラスで行っている。Show and Tell以外の活動は絵を見て英語で描写する(pair work)、絵カードを組み合わせで物語を作る(group work)がある。また、本年度は新しい試みとして、国際開発の授業からヒントを得たPhoto Languageという活動を行なった。

Journal writingをアウトプットの核にして「書く、話す」というproductionの枠組みの中で「読む」「聞く」活動を連携させることを心がけている。

本年度からの取り組みとして、中2の必修クラスでShow & TellをALTとのTTで行なっている。さらにproduction能力を高めるために、Dialogue Journalを始めた。Show & Tellはオーラルの活動だから、Journal writingとは一見関係は薄そうだが、前述した

ように「話す」「書く」をproductionという枠組みで見直すと、特にスピーチはまとまった英語を予め準備して話すというものであり、writing指導と結びつけることは容易である。しかし、writing指導だからといって、いきなり文章の構成や誤りに対する厳しい指導を中高生に行っても、文を書くことへの恐れを植え付けてしまいかねない。そこで、話すように書く、誤りを恐れず伝えることのおもしろさをまず経験するために、Dialogue Journalという手段を選んだ。

Dialogue Journalとは、簡単に言えば生徒-教師間で行なう英語の交換日記である。アメリカの雄ESL教育では非常に成功したアプローチである。その特徴は、英語の誤りは一切訂正せず、あくまで内容に関しての生徒と教師の書き言葉でダイアログを行なう。

中学生では日記的な内容はもちろん、教科書の主人公を自分に置き換え、書きかえをしたり、自分の知っている英語を使うために想像を交えて書いたり、文にならない時は単語を並べるだけでもよいというものである。日記ともまた、英語雑記帳とも言える存在である。中学は全2クラスのうち、1クラス半年ずつにわけてDialogue Journalを行っている。

高校は英文日記として、32名のライティングクラスで行っている。

いずれの場合もできるだけ多くの英語を使うことが第一目標とさせ、意味の交渉が重要で、エラーはあまり気にせずまた、どうしても文にならないときは単語を並べるだけでもよく、絵などの表現も可として書かせている。週1回、ジャーナルを提出させ、教師がレスポンスを随所に入れ、あくまで内容に関してのやりとりを行う。教師は読み取れない部分について言いたいことは何かと質問したり、「Do you want to say ~?」という意味なのかと質問したりする(この中で暗示的に正しい英語を示すことはある)

Dialogue Journalを行なっているクラスでは一人当たりのShow and Tellは長くなる傾向がある。長ければ良いというものではないが、少なくともこういう傾向がある。

【参考文献】

- 釜原雅彦. (1999). やさしい教育心理学 有斐閣
- 木下雅仁. (2002). Long Term Projectでつなぐ導入期の授業デザイン 三省堂英語教育・中学編 別冊第13号 pp. 1-4
- 佐藤雄大. (2002). 過程中心指導理論にもとづくダイアログ・ジャーナル・アプローチを用いた英

作文指導 in press.

鈴木克彦. (2001). Teacher's English Storytelling in Junior and Senior High School: Skills for making, collecting, and telling stories and A start-up collection on video and in booklet 南山大学大学院外国語学研究科英語教育専攻紀要

鈴木孝夫. (2000). 日本人はなぜ英語ができないか 岩波書店

Swain, M. (1998). Focus on form through conscious reflection. In M. Doughty & J. Williams. (Eds), Focus on Form in Classroom Second Language acquisition (pp. 64-81) Cambridge: Cambridge University Press.

Swain, M. (1985). Communicative competence: Some roles of comprehensible input and comprehensible output in its development. In S. Gass & C. Madden (Eds.), Input in second language acquisition (pp. 235-253). Rowley, MA: Newbury House.

Wigfield, A. (2001) Development of Achievement Motivation. San Diego:ACADEMIC PRESS:Tharp & Gillimore